

道北女性の「どっとねっと」懇談会 土地とつながる「女性力」の現地から

日 時：平成 22 年 7 月 19 日（月）13：00～15：30
一部 19:00～

場 所：天塩郡幌延町字下沼 81「法昌寺」
参加者：（敬称略・カッコ内はニックネーム）

岩澤光子（ちるまま）

稲垣順子（おてい）

大平寿江（ゴンタのママ）

村上京子（きょうこワン）

司 会：草 苺 健（take）



座談会のねらい

草 苺： 北海道の各地域から人が減って高齢化していく時代に、それでも元気で頑張っていくためにどうするのかということが、今、色々な場で話されています。地域のブランド作りだとか地域 SNS のような IT なども、今後重要な役割を果たすと考えられています。そういう幾つかのことを掘り下げて行きますと、地域には元々色々な力があって、その中にはどうも女性が中心になって支えているようなところがあるということに気づいてきました。実はこれまで、そういった地域の元気みたいなものは、たいてい他所からやってきた創造的な仕事をする人達とか、他所からその地域に何かの縁で移住して来た人、そういった人達が盛り上げていたりする、と言われたり書かれたり



草 苺 健
（take）

してきました。

しかし、幌延のおていさんのお話を聞いたり、西興部の女性グループを伺ったり、道内の各地で耳をすましていると、それだけじゃなくて、地域の元気というのは自然に生まれているみたいだという事例が見えてきたのです。お話を聞いて、やっぱりそうなのだと。そういう時にもやはり女性というジェンダーが、男にはないつながりを作ったりする、非常に良い潤滑剤や接着剤になっているように見えるのです。

それで、そういう視点で世の中を見て行くと、例えばNPOの後ろ側だとか、それから地域の子育ての舞台裏だとかに、必ず女性のネットワークがあって、それがどんどん広がっていったりしている。それで、社会学の先生に、今こういうことに関心を持っていて座談会や色々なことをやっていこうと思うのだと言うと、その先生が「これからはまさに女性が地域の課題解決に力を発揮するだろう。そういうところまで差しかかっている。」というようなことを、直ぐ言われた。それが、この座談会の強い追い風にもなりました。幸い、道北には、「どっとねっ」と入っておられる方が4人いらっしゃって、それぞれ素敵な活動をされているので、去年に引き続き、こちらの方の人の集まりやすい法昌寺の場をお借りしました。座談会で念頭におきたいキーワードは、「土地」「つながり」「女性力」「現地」です。「土地」というのは、後で都市と地方とかというお互いの良いところと悪いところの話をしてもらいたいのですけれど、その具体的な風土、自然、それを「土地」としました。そして繋がるという、人と人とか、人と地域とか、人と自然でも良いのですけれど、そういう「つながり」というのも一つの重要なキーワードで、そこを女性というジェンダーの特有の部分が接着剤となって色々なものを繋げていく。女性にはそういった力がある。それを「女性力」と呼んでみました。そういうグローバル化の対極にあるローカルな「現場」「現地」というのが、羽幌、幌延、鷹栖、西興部など、全道各地にある、そこでのリアルな生活体験とそれを通じた哲学をお聞きしたいというのが、この座談会のねらいです。

たとえどういってお話になっても、このタイトルのあたりに戻りながら、たっぷり話を進めて頂ければと思います。

前置きが長くなりましたが、私の方は最初の投げかけをしたあと、あとは一人ずつお話をさせて頂いて、それにさらに質問や感想などを投げかけて頂き、また次の話にいくような形で進めていきたいと思っています。始めは、自己紹介と近況と言いますか、最近こんなことをしているとか、こんなことに関心があるとか、それから自分がお住まいのところのコミュニティみたいな、町内とか町や村、そういうようなお話をちょっと挟んで頂ければと思います。

それでは、岩澤さんからお願いします。

自己紹介『わたしの住んでいるマチのことなど』

サハリンからの引き揚げ、そして看護婦を目指し羽幌を離郷

岩 澤： おていさん以外は初めてお会いした方々ですが、プロフィールのところにも少し書いてありますが、私が生まれたのはサハリンです。終戦直前に生まれ、引き揚げてきたのは最後の方だったそうですけれども、昭和24年の4歳の時。それまでサハリンに抑留されていました。高校を卒業するまで羽幌にいて、卒業後は看護婦になりたくて東京の日赤短大に入学するため羽幌を離れて以来、ずっと戻ってきませんでした。卒業後は看護婦となり、そして結婚して子どもができてということで、ずっと東京で暮らしていました。



岩澤光子
(ちるまま)

母親が一人で羽幌に暮らしていたのですけれど、ある時に母親が倒れ、緊急入院し、母親の住んでいたところへ急いで行ってみたら、なんとゴミもちゃんと出せていない状況でした。いつもこうやって暮らしていたのかと、その時はじめて母が暮らしている様子が見えたのです。今まで私達家族はいつでも予告をして母親のところに来ていましたが、そうしたら母親はまずいものは全部隠してきれいに私達を迎えていたようなのです。

母が退院してから、家族が1週間とか2週間とか休暇をとって、少し元気になるまでということをやっていたら、上の息子がよく観察していると、「おばあちゃんはお薬も何も飲んでいない」ということがわかりました。やはり一人暮らしは難しいのではないかと。みんなで何回か話し合いました。母は私の三番目の子どもがあまり丈夫ではなかったものですから、冬の間はいつも3ヵ月か4ヵ月東京に来て、18年ぐらい冬は一緒に暮らしていたのです。ですから、私達家族は母が一人暮らしが難しくなったら、スムーズに私達のところへ来てくれると思っていたのです。ところが絶対に東京は嫌だと言い張ります。だけど一人暮らしができないとなると誰かが北海道へ行くしかない。それで私が仕事を辞めて、母が元気であるうちは母と一緒に故郷で暮らそうと思って帰って来たのです。

谷地（湿地）消失の驚きとサロベツが繋ぐ人との出会い

それで、3年半前に来たのですが、帰ってくる時はあまり良い気持ちではなかった。仕事も途中で、下の子どもはまだ大学生でした。しかし来て、今ではすごく母に感謝しています。母があの時にもし東京へ来ていたら、私は自分が育ったところを何も知らないまま一生終わってしまったと思います。羽幌に来て一番最初に驚いたのは自分が小さい時とすっかり変わってしまっていること。特に驚いたのは谷地がなくなっていること。谷地というのは湿地です。小さい頃というのは至るところに谷地があって、そこは足を取られるから行ってはいけないという子供にとっては禁断の場所だったのですけれども、そういうのが全部埋め尽くされて谷地がなくなっていました。それから、川がきれいでなくなっていて、砂利を全部取りつくし、川を直線化して川の流れを変えてしまって川が川でなくなっ

ているということ、その二つにものすごく驚かされ、それでそうこうしている内に、サロベツを知ったのです。

それで、サロベツで自然の友達がたくさん出来て、それで逆輸入のような形で羽幌にもいる鳥の愛好家という人達と知り合うことができたのです。それで、2年前に鳥というものを初めて見ることになって、それ以来、とても鳥が好きになって、そのために鳥を見たいとか、自然の記録を細かく残しておけないかということに関心をもつようになりました。カイツブリの子育てとバンが子育てをしている場所を2年がかりで見つけここのところ数日はそれにかかりきりです。

今、カイツブリは背中に雛を乗せています。それを見るのがすごく楽しいのと、それからバンの雛というのは頭が禿げているのですね。だんだん毛が生えてきて、今ちょうど毛が生え揃ったところで、それがすごく可愛いのです。去年は2羽しか育たなかったのが、今年は4羽生んで、4羽とも大きくなっています。今はすごくその二つの種類の鳥の子育てに夢中というところですよ。

草 効： 「どっとねっと」では、いつも迫力のある写真を拝見していますが、どのぐらいの距離から撮っているのですか。

岩 澤： シグマの50～500ミリのレンズで撮っています。両方とも溜め池で、私が草に隠れて撮っていても、彼らは大概気が付いていて、対岸の端っこにいます。だから、結構遠い距離です。プロミナ（野鳥用の一眼のフィールドスコープ）で見ている分にはすごく細かいところまで見えるけれども、自分が撮る分にはなかなか上手くはいかないです。

それで、羽幌に戻って来た時には、故郷がすごく変わったことに悲観していましたがけれども、逆にもう一度見直してみると、まだまだ自分は探せていないだけで、子どもの頃とは違う場所に今まで知らなかった素敵な花だとかがたくさんあることに気が付いたのです。決して大きな町ではないのですが、周りに原野があって、全部見るといったらかなり広いので最近羽幌が忙しくなっています。

羽幌では今年、7月8、9、10日と羽幌祭りがありました。夏祭りですが、50年近く途絶えていた加賀獅子が出たのです。獅子舞とはちょっと違い20人ぐらいが中に入って頭を3人ぐらいの人が持って練り歩きます。北海道の町はどこでもそうかと思うけど、色々なところから人が来ているから、お祭りも寄せ集めです。色々なお祭りを一つにして合体させています。例えば、私達の町で言えば、天狗行列があって、奴行列があって、そしてその加賀獅子あって、神輿があってという感じです。ずっと昔は青獅子と赤獅子の二つの獅子が出ていましたが、50年ぐらい踊り手がいなくて絶えていたのが、加賀獅子保存会の人達が復活させようと言って頑張ってきて、今年50年振りで青獅子が復活したのです。とっても良いお祭りで、私も初めて見たのですけれども、神輿を普通はこういうふうに担いでいる。それを斜めにすると、その加賀獅子が2頭で神輿を駆け上がるのです。昔はニシンが獲れて勢いがあった時には漁師も大勢いてお祭りもすごく荒っぽいものだったようで、人口が少なくなった中、皆の努力でそれが復活されて私もとても感動して見ました。

私は今、母がわがままを言うてくれたおかげで、ここで暮らせることをすごく感謝していて、楽しんでます。夫はブーイングしていますけれど。車で10分も

かからない川でイワナが釣れたりします。干物にして、「何にするの、それ」って言ったら、「骨酒にして飲む。」とかと言って楽しんでいました。すごく自然が豊かだということを夫も実感して、それを自慢しているようですよ、釣り仲間にお魚を釣って持って行くのです。

夫の来道は1年に2回ぐらいです。こんな訳ですから、私は、おばあちゃんにも気張って長生きしてと言っています。

草 苺： では、次に稲垣さんお願いします。

釧路から福祉を目指し旭川。そして幌延へ

稲 垣： 釧路で生まれて19歳までいました。福祉の仕事がしたくて、旭川の学校に通い、その後、幌延町の障がい者施設に勤めました。そこで夫と出会い結婚しました。たまたまこの下沼地区の小中学校が統廃合するという時期でした。小中学校の先生の奥さん達が託児所みたいなことをしていたのですが、廃校になると子どもを見てくれる人がいない。そこで下沼地区の方々に「資格もあるし、是非ここで働いてほしい」と言われました。私も早く土地に慣れた方が良くと思い、こっちに来ました。

原野が好きとか、そんな気持ちはなかったのですが、何かあると自分を見直したい、一人になりたいという気持ちが起き誰もいない木道を歩いたりしていました。そんなことを何年かしているうちに、だんだん原野に目がいくようになってきました。



稲垣順子
(おてい)

サロベツ原野に通う日々の中で気付く環境の変化

今、気になっているのは、パンケ沼です。今年はアオコがすごいのです。実は一昨年ぐらいから、シジミを育てるのに沼に砂を入れる実験をしています。冬の間沼の雪上に砂を置き春になったら雪の下にどんと落ちるようにしていますけれど、今年の春先はその砂が残ったままで岸みたくなくなっていました。水鳥がそこにとまっていた。そんなことは今までには無い光景でした。どうなってしまったのだろうと思っている内に、砂が流されて良かったと思っていたところアオコが出てきました。でもその砂が原因かどうかはわかりません。

岩 澤： 気温が高かったからでは。

稲 垣： 多分、原因は気温だねというふうにはなっていますが、調べたことはないです。

村 上： アオコがいっぱいいると、シジミは息ができなくなってくるのですか。

稲 垣： 良くはないでしょうね。ほとんど毎日見ているので、なんか変だというのはなんとなく肌で感じます。

草 苺： おていさんから見た、例えば下沼、あるいは幌延、サロベツは、それはどういう感じを持たれていますか。難しい話ですけど、幌延という感じよりもサロベツという土地の捉え方がしっくりくるとか。

稲 垣： ここに住んでいるので、どうしてもサロベツ原野が庭のようなものなので、幌延の町にはなかなか行くこともないし、お買い物も豊富の方が近いんです。夫は

仕事で幌延に行くことがありますけれども。

草 苅： おていさんは、心象館のようなところもアーティストを呼んだりして、ケアしているんですね。

稲 垣： 心象館は幌延出身の書家、金田心像さんの書道美術館です。すごく素敵な建物です。横にキャンプ場があって、住宅街にあるのです。でも町民にはあまり利用されていません。こんな素敵なところがあるのもったいないと思って、心象館コンサートの企画運営をずっとしています。年に1度のコンサートには町民は心象館に入館してくれます。

草 苅： では、次にゴンタのママさんお願いします。

おていさんとパソコンとの出会いが変えた日々の風景

大 平： 私は隣町の豊富町の酪農家に生まれて、23歳の時にここに来ました。それからずっと牛飼いをやっていて別に何もなくて過ごしてきましたけれど、おていさんと出会って、全然世界が変わったと言う感じです。

おていさんは、保育所の先生をされており、その時から子どもがずっとお世話になっていましたので知ってはいましたが、色々な面でお世話になってきました。今までの私はただ牛飼いをやって、どこにも出たことがない。ここで生まれて、ここで育って、ここに来たという。隣町も同じようなものだから。本当に世間知らずで。

パソコンを始めてから、おていさんに mixi を教えてもらって、「どっとねっと」にも入れてもらい、農家以外の色々な職業の人の話とかを初めて聞けたと言うか、人に触れられた。やっぱり牛飼いをやっている、牛飼いの人との話になってしまう。愚痴になったり、人の噂話とか、牛飼いの仕事の話ももちろんしますけれど、あと町の人ともあまり接点がないです。時間帯が合わないというのがまずは理由になっていますけれど、それ以上に自分の気持ちが、何かもう一歩出れば色々なことが楽しめるのだけれども、そうしない習慣と言うかそういうものがあるでしょう。婦人部とか農協の集まりはありますが、やはり農家だけの集まりになってしまって、町の人と何かやろうかということになると、そんな時間はないとか忙しいという理由で、全部そういう話はなくなってしまう。

そして、私は自然の中で生まれ育って来たので、自然の良さというのは逆に全く知らないできました。「何がいいのこんなの」と思っていましたし、喫茶店だっけないし何もなし。都会に憧れるのですね。でも、その自然の良さを教えてくれたのがおていさんで、今までこんな良いところにいたのだなということに気づかせてくれた。今は鳥とか植物とか、今までそこら辺に咲いていたりしたものが全然目に入らなかつたのだけれど、今はトラクターに乗っていてもあっちこっち見て、よそ見してしまう。旦那の目を盗みながらトラクターを止めては写真を撮ったり。今までは、ただ乗っていたから、眠くてしょうがなかったけど、そういう楽しみが出来て、目をらんらんとさせてトラクターにも乗れるようになり、この写真を撮ったら日記をアップしようとか、そういうふうにも考えられるようにな



大平寿江
(ゴンタのママ)

った。それがすごく楽しみになった。でも体力がなくて、夜は眠くて、せっかく撮った写真も載せられないというのがたくさんあります。だいぶん載せていないのもあるのだけれども、やっぱりその日に撮った写真をあまり遅くならないうちに載せてみようと思っています。今はそういう楽しみがすごくあります。

草 苺： ゴンタのママさんのルポは、すごく人気がありますよね。牛の出産が難産だったなんて、ああいうようなのは他の追隨を許しません。(笑い)

大 平： 私には普通のことです。本当言うと、こんなものを載せて良いのかなとか思いながら、いつも載せるのだけれど。だいたい同じような話になってしまう。だから、こんなアップしてもいいんだろうか、というのがたくさんあって。(笑い)

草 苺： 今の酪農家のご主人というのは昔の酪農家のご主人と違って優しくなったというのはないですか。外に出やすくなったとか。

大 平： うちの旦那はもともと優しい。(笑い)そういう人って、だいぶん増えてはきていると思うのですけれどもね。ヘルパー制度もできましたし。

稲 垣： お互いに楽しむと言うか、尊重し合っているというふうに、私からは見えます。でも珍しいと思いますよ。ゴンタのママさんとの共通の話題が、子どものこともそうでしたけれど、やはり主人の親と同居というのが一番。

大 平： そうですね。今は二人ですが、ずっと一緒にいたので。やっぱり気持ちを通じると言うかわかりますから。

草 苺： では次に村上さんをお願いします。

九州男児の父のルールから一路北海道へ

村 上： 私は大平さんとは全く違う生い立ちです。生まれは東京、父は大手ゼネコンで高度成長期まっただ中の企業戦士としてひと月に何回かしか顔を合わせないような人でした。母はそれに対して身を粉にして内助の功をやって父の出世街道を支えたという人です。

私は九州の福岡の大学に進学させてもらいましたが、単身だったので羽を伸ばし放題でした。入学当初はデザイン科でしたが、将来を考え親しみもあり、インテリアデザイン科へ進み、ものを実際に製作するのが面白く、家具を作るゼミに入りました。ですから、就職はそういう前提でした。九州には大川という家具の大産地があるのですが、父は私には言わずに、同級生とすべて話を決めていたのですが、福岡の家具店に並んでいたホワイトオークで出来た家具のメーカーに惹かれて、父の方針には従わずにそのメーカーに面接を申し込みました。運良くというか、それで北海道へ来たという事です。

家具の会社で働いている頃は、私が活発だからだと思いますが、売り場で直接接客しながらの営業でしたが、家具を売るだけではお客さんの問題解決にはつながらない事が多く、つまりは、家具だけを置いても解決出来ない問題がいっぱいあって、これは建築をやらなければいけないのだと気がつきました。会社を辞めるタイミングで、失業手当を頂きながら、職業訓練校で2級建築士の資格を取る為に一年間お勉強しました。大学のときに人間工学やインテリアデザインを学ん



村上京子
(きょうこワン)

でいるので間取りを考えるのは楽しかったですね。

卒業後はハウスメーカーではなく、家づくりの現場に近いところで仕事したかったので地元の工務店に行きました。

家具の販売の現場でお客様の相談を受けるのは得意だったのですが、つい、顧客の希望に傾きがちで、社長からよく怒られていました。(笑)いろいろな意味で住宅を造るのはほんとうに難しいと思います。

けれども、私が担当した間取りはお客様には喜ばれました。家具や導線、収納計画に詳しいので、それまでの男性の営業さんが考えるおおよっぱな間取りの家より、暮らしやすい住まいが出来るのです。

最後にお手伝いした小さな工務店さんを辞めた後、当時参加して活動していた北海道建築士会で知り合った、道北、北見、帯広、などの独立してがんばっている人達に影響を受け、応援の仕事の頂いたりしながら独立して仕事をすることになりました。請負でデザイン施工なども手がけるようになり、頂いた予算で最高の仕事を目指し、そうすると、自分がやりたいようにするには、いろいろ手がけなければならなくなり、そういう事で、だんだん職人さん達と直接やり取りするようになっていきました。

草 薙： だんだん親方になっていくわけですね。

村 上： 結局そういうことをしないとできません。そうしないと食えなかったというのもありますが、面白かったですね。そういうことを頼む面白い人も北海道にはいるし、そういうことの判断ができる人もたくさんいるわけです。そういう繋がりです。今まで来て、そしてある時に、網走の方だったか、カナダの人が来ているぞという話を聞きました。けれどそこでダニエルと会ったわけではないです。

草 薙： それはカナディアン 2×4 の走りの頃ですか。

フリーター生活時に出会った医大の先生からの依頼

村 上： ある医大の先生に「あなたは面白い。出来るのだったらそういうやり方で面白いからやってみなさい。」と言われ、札幌の中央区円山の近くにカナダの資材を使った三階建ての家を造ることになり、そのときのクルーで第2陣としてやって来たのがダニーさんでした。現場で納まりのトラブルが起きたりするのですが、彼が様々な問題を一生懸命解決してくれたんです。

ちょうど彼も 50 代にさしかかる年齢で第2の人生を探していたそうで(笑)着いて行けば面白いという風に思ったのかもしれませんが、私も勢いで残ってもらうように頼んでしまったという訳です。(笑)

ダニーさんは初めての日本ではなく、長野にすでに来ていて、アメリカの激動の時に育っている人なので、日本人の非常に繊細な部分とか日本文化に魅かれたのではないですか。でも、実際は違ったでしょうねえ。住んでみたら、サプライズみたいな感じですか?!ダニーさんが来たので、私はシティガールだったのに、工房も建てなければいけない、場所も探さなければいけない。札幌圏にいれば最高ですよ。札幌の人はなんで札幌に住まないのだと言っていたのですけれども、ダニーさんが田舎でないと駄目だと言うのです。やがて田舎に行くことになったのですが、それは全部彼のせいです。

草 薙： ネイチャー派なのかシティ派なのか混然としていますよね(笑い)。よくわかりました。

村 上： 私の生まれ育ちをふり返ると、狭山ヶ丘に住んでいる時が一番長かったのだけれど、それこそジブリの世界でした。あそこをずっと学校へ歩いて通っていて、その時に虫博士の称号をもらいました。昆虫図鑑をほとんど覚えていました。だから、自分の原風景は田舎なのですよね。でも、多分、性格的には人と関わるといようなことをしないと、自分を見つけられないのかもしれないです。うちの旦那は私とは逆ですよ。彼は、まわりに誰が住んでいようが関係なくて、自分のことだけやっていけば良いという人なのです。私はそれだと自分が何をやって良いのかわからなくなってしまうというのが、きっとあるのかもしれないです。

うちの相棒が来ることになった頃は、旭川の真ん中に住んでいたし、田舎なんかよく知らないから、私も知人がいない。その時に偶然、私の周辺にいた人が鷹栖というところを案内してくれて、行ってみるとそこは、地の利も良いし、風水的に、私には良かった。地図を見ていると、南に平野が広がっているのんびりしていて、なんか雑音もなさそうだしどこに行くにも結構アクセスが良いのです。それで、ここは良いかもしれないという、そんな感覚でした。だから、その時はその町村の雰囲気はどうこうとか、歴史も知らないし、全然何も知らない中でそこに入ったことになります。

草 薙： そういう意味では純粋に土地と繋がった最初ですか？。

村 上： そうなのかな。雪は多かったけれど、雪は好きだし気にならないと思いました。でも入った後にその暮らしの中で様々なことがありました。外国人と一緒にだったというのもあったと思います。

【 土地とのつながり 】

犬ぞりとの出会いで始まる土地とのつながり

草 薙： 次の話題の「土地とのつながり」がちょっと出たので、村上さんから今度、鷹栖を選ばれ、その後、色々な人と人とのつきあいやつながりも出てくるわけです。その辺のところを話して頂けますか。

村 上： 面白かったのは、鷹栖に入ってから。雪がきれいでたくさん降るし、仕事柄、冬はあまり仕事が無いのでどうしても冬休みみたいになります。田舎に暮らし始めて飼うことになった愛犬のハスキーと、歩くスキーでよく家の周辺を歩き回っていました。あるとき、夏祭りのあんどんの製作を手伝っている時、町内で犬ぞりをやっている人に出会いました。けれど、当時は仕事が忙しく、なかなかご近所付き合いができず、その後、町内で転居をすることになり、偶然その冬に犬ぞりを体験するというきっかけを頂いたんです。最初の体験の時は、まあそれは衝撃的に楽しくてイヤな事は何も忘れるくらい、ほんとうに楽しくて、まあ、心のつぼにはまったという感じでした。

それで、冬になったらこれをやろうと決心したのですが、犬を借りてやるので

はなく、ちゃんと譲ってもらって育てて自分の家族としてやっていこうというふうに思いました。それで、主人には内緒で、アラスカの橇犬3頭を譲ってもらいました。そこから今に至る始まりですね。

私は不肖の弟子だったと思います。結局自分でやってみなければ気がつかない事ばかりなので、時間を見つけては1人で練習していました。月夜の晩に道路で練習するので、ムーンライトレディースと主人が勝手に名前を付けました。ダニーさんはお手伝いはしてくれるけれど、横でみているというふうでしたが、橇に関しては思うことがあったらしく、橇で走っている私の様子をずいぶん観察していたようです。橇は最初、古いスキーを使って作ってくれましたが、大会に出場したりする中で、本気で製作に取りかかるようになり、冬に仕事が少ない職業だったから、そうやって冬が来る度に橇を作っていました。だんだん進化向上していったのが、今の体験用の犬ぞりですね。ともかく、ヒマな冬に二人でやる事がいっぱい出来ました。外国人と暮らしていれば、なんとなく疎外感があるし、自分たちだけの世界の中で強い危機感を感じるという事もあります。それと、建築という仕事は、暮らしや土地に付加価値を付けないと出てこないのです。建設的という言葉があるように、建築をするという事は、前向きな将来的な必要があって発生する、いわば、将来への投資みたいなもので、不確定な未来に夢とか希望が持てないと、自分たちの生活空間を豊かにしようとかいう発想も出てこない。付加価値を付ければ、自分達の仕事は出てこない。未来も無い。この町は冬がとにかくネックと思い込んでいるから、この発想を変えないと。旭川に隣接する利便性のよい場所にあって、様々な暮らし方も選択が出来るはずだけれど、よっぽど思い詰めていたんですね。(笑)

それで、自分は犬ぞりは楽しいし、犬ぞりを体験したい人は来るかもしれないと思いました。偶然すんだ場所には、犬ぞり練習におあつらえ向きの農道が付いていて、そこからの眺めは癒される田舎の雪景色。ここでも出来るのではと思い、旭川のある友人にその思いを語ると、北海道新聞の記者に伝わり、写真付きで大きく載せてくれました。そのうちテレビはやってくるし、それがちょうど2002年の事でした。人がやってくるようになると面白いのですよ。仕事やプライベートでは決して知り合うような事の無い人がやってくるのです。犬ぞりをやってみようかというような発想を持つ人は、やはり女性が多くて、思いのほか年齢が高かったり、個性が生き生きしているというか、独自の発想の自由な雰囲気の人だったり、いらっしゃる方とお話をするのはとても楽しくて、閉ざされた冬からとても社交的な冬に変わり、ダニーさんなんかは、外国のお客さんが来るとつかまえて帰さない(笑)結局、あっという間に冬が終わるようになり、自分たちの中で非常に手応えを感じられるようになりました。

犬達も毎年、冬になったら犬ぞりがしたくて待っているし、その繰り返しでだんだん今の形になっていきました。ダニーさんが橇をどんどん改良し、見学用のモビルソリだとか、コース整備用の道具もずいぶん進化しました。今は、カーブにはバンクを付けたり、雪がふきだまって斜面になる場所もきれいに水平に整備出来るようになっていきます。お客さんが安全に気持ちよく体験出来るように犬達にもとてもいいのですよ。海外からもお客さんが来るようになった、今の犬ぞり体

験が提供出来るようになったのは、毎年経験と工夫と改良の積み重ねがあったからこそだと思います。

そうこうするうち、犬がだんだん増えていき、冬の行事は休みがちになる、犬が逃げるなど、ご近所付き合いにきしみが出来て来て、子供でもいれば、親同士のつながりもあるのでしょうか、なにせ、つながりが無く、うちに来て主人とは、言葉が通じない、奥さんはいつも忙しそう、そのうちに、ありもしない陰口を流されたりで、最初の頃から比べるとだんだん気持ちが疎遠になっていったように思います。こういう農村コミュニティの中では国際結婚で自営業のカップルは、たぶん異物なんだと思います。町全体のなかでも、自分達は異質なんだろうなあと思います。けど、それは仕方が無いですね。

草 薙： そういう状態と言うのは辛くはないのですか。別に何も軋轢はないのですか。

村 上： やっぱり辛いこともあります。うちの師匠とは、いっぱい喧嘩もしたけれど、今でもやり続けられたのは、一番大変な時とか、最終的に師匠が後押し的な助言をしてくれたりするのです。そういう人の存在はほんとうに支えになったと思います。

草 薙： お師匠さんも他所の人ですか。

村 上： 札幌のご出身です。今、私がうちの町の中で本当に繋がっている方というのは全部町外の人ですね。しかも子育ても何も関係のないところで繋がる方達です。でもみんな期待もできないから、だからそれぞれ孤独な戦いをやっているのだと思います。

草 薙： ある種、都会的な繋がりと言っても良いのかもしれないですね。ネットかなんかで繋がるのでしょうか。

村 上： いいえ。他に人に教えてもらったり、尋ねて来たり。例えば、田舎暮らしを考えて、不動産屋さんを通じてあまり良く知らない状態でうちの町に入ってきた、奥さん1人でやっているパン屋さんがあるのです。でも周りはパン食になじみのない古いコミュニティですから、天然酵母パンは値段の面など、なかなか評価がされないとかあります。でも今は固定ファンも増えました。その土地の中で何か活動をすると言うか、住んでいる人が自分の付加価値を伸び伸びと発揮できれば、とても個性色とりどりの町になって楽しそうです。大きな事をしなくても良いから、とにかく生き生きとそういうふうになればと思いますね。

草 薙： この辺は非常に最後のところでももう1回出てくる面白い話だと思いますね。

ではここでもう一度現場の話に戻って、大平さん、稲垣さんの順で、幌延と今の村上さんのお話を比較して面白かったとか、ここがこんなふう違うとか、その辺のところをちょっとお話して頂けませんか。すごいドラマのような話でした。

今、つながりを楽しみたい

大 平： やっぱり生まれ育っているのが違うなと思って聞いていた。こういうところでは、どこからか入ってきて何かをやるというと、やっぱり妬みみたいな、そういうのがあのような気がします。なんでそういうふうに見てしまうのかわからないけど、自分達は何もやらない、今までの生活をただただやっていけば、それで良

いのかもしれないけれど、面白みがないというのは感じるところです。誰かが入ってきて、農家なんかでも跡取りがいなくて、どんどん少なくなっているから、どんどん入ってきてもらって、入れるようにした方が良いという考えもあれば、そんなわけのわからない人に入ってこられて滅茶苦茶になる、それだったら止めた方が良いという、そういう考えの人もいたりします。隣町の天塩とか豊富は新規就農者が入ってきています。やはり空気が違ってくると思う。そういうのを楽しみと言ったらおかしいけれど、楽しみたいという気持ちは私にはありません。やはりそういう何か違うこと、違う人とのつながりを楽しみたいです。

村 上： 刺激はきっとありますよね。私達の場合だとユニークでしょ、だから、他の人がやるよりは注目度が高いし、色々な意味で、やったら効果が高い（笑）何かの形に繋がるに違いないと思ってた。でもそれを地元の人達が望むとは限らない場合もあるということがわかった。もちろん先輩達、若い人もいるわけだから、本当に色々な考えがあると思います。その中で自分が楽しんでいられないと、人に対するサービスができないから、楽しむことはとても大事です。色々なことがいっぱいありますけれども、今年は映画の手伝いをしたことが公開になるらしいし、ひととおり全部成果が出たなと思います。出たところで、これはどういうことなのかなと思いながら、「私の生活って何？」みたいなのということはやっぱり考えますよ。色々なふうに考える。人の幸せを願うというのは大変です。

稲 垣： 一緒に悲しむことは案外できるかもしれない。でも人の幸せを願うのは本当に難しい。

子どもの一言で気付かされた土地に対する意識

草 苺： おていさんは村上さんの後半の辺りのお話を聞いて、どんなふうに感じられましたか。

稲 垣： 職業がうちだけ違ったりすることで、例えば集落で何か集まりがある時にうちだけファックシミリが入らなかったとかはあります。それはしょうがないのですよ、農協で一斉に流したりするから。でも、そのことでみんなで使っている会館の掃除日の連絡が私だけ何年も知らなくて行かなかったとか、そんな小さなことなのですけれども、どんどん溜まっていくと、もしかして掃除に来ないねとか言われているのではないとか、つまらないレベルですけど、でもそれが日常なので、気にとめる訳です。どうして電話一本くれなかったのだろうとか。私ならこうするのにとか。家の中で小さな町は独特だよ、ということを愚痴っていたことがあるのです。そうしたら、息子がまだ小学生だったので「僕はここで生まれ育っているのだから、この悪口を言わないでくれ。」と言った。私はここで子どもを生んで育てているのに、土地のことを悪く言ってしまい、それはいけないのだと気づかされて、それからすごくここは自分の地域なんだと意識するようになりました。でも、つい自分の都合によってよそ者意識が出てくる。

村 上： それは私も多分そういうふうに思われているところが色々あるのかなと感じています。でも最近はずっとやっていることに関して、成果が出てきたところでまた違う接し方もされていると思います。

草 苺： メディアに出て、この人はこんなことをしていたのだという発見みたいに普通

はなっています。それは逆に妬まれたりもするわけですか。

村上： スルーじゃないかな。でも、店や郵便局で声をかけられることもあります。最近町の広報誌みたいなものに載せてくれました。

草薙： さらに逆に言うと、その周りを取り囲んでいる人達とのつきあいの向こうと言うか、その人達が持っている正攻法ってどういうことなのだろう。例えば1軒1軒引越した時に何かを持って「よろしくお願いします。新参者でございますが。」と一応仁義も切って？

村上： やりました。町内会にかけられたそうですよ。それで私はダニーさんと私のプロフィールみたいなものを書いて配っていました。そして2年ぐらいかな、ダニーさんがスモークサーモンを作るたびに周りに配って。犬ぞりをやるようになって、冬の行事には欠席がちになり、一方で犬の鳴き声もします。それでも、うちの直近のお隣さんは文句を言いにくいのですよ。冬は窓を閉めているから気にならないそうで、その代わり夏はキツネが来たときとかうるさいかもしれない。今思えば、犬ぞり体験をは始めるとき地域の長老にあたる方に挨拶をしに行ったりしました。シーズン中50人とか80人ぐらいだったらポツポツしか来ないし、冬になるとうちの前は車も住んでる人以外通らないですから静かなものです。正月の新年会とかに取りあえず出て、お酒やって、今年はこんな状態ですなどと話題にしました。

草薙： そういうことはしていないと思っていた。

岩澤： 途中から入るものは、やはり嫌いだけれど。

村上： 葬式はとにかく全部行って、二日間びっちりお金の封を切ったりしていました。

【 土地を客観的にしてみる 】

生まれ育った町の40数年の空白期間

岩澤： 私なんかは自分が育った町だけれど、40数年も留守にしていたら知っている人は誰もいないじゃないですか。同級生だって、私なんか高度成長の時代だから、みんな外に出て行って、本当に数えるほどしか残っていない。ただ、私の母も他所者だったわけです。樺太から引き揚げてきて、それで苦労して、ずっと公務員で仕事をしていて、仕事が終わってから色々なボランティア活動とかをしていたので、私が来た最初に、 さんの娘さんね、ということで受け入れてくれた。でも、来る時は早く馴染みたいと、そうしなかったら母の介護はできないし、自分も母の介護だけをしていたら絶対上手くいかないと思って、何をしようかと考えながら来た。

まず絶対に車の免許は取らなければいけない。そうしないと何もできない。もう一つは新しいものを作ることはできないのだから、自分が既存の中に入ってできるものを探そうと思ってきたの。だから、来る前からアンテナを高くして公民館に問い合わせたり色々して、何と何をしようというのをだいたい決めて来た。さっき言われた町内会の新年会とかも最初から母と一緒に出て皆さんにご挨拶して、私はできるだけ早く受け入れてもらいたいと思って来ました。それで、絵本

の読み聞かせのボランティアをしようと思って、来て直ぐにそこへ行って入れて頂いた。来た最初は、私は鳥を全く知らなかったのですけれど、山登りをしていましたので山の花にとっても興味があって、向こうで高いところに咲く花が、ここでは平地で咲きますしょ。だから、こっちへ来たら花を見て歩こうと思っていたのです。ですから、自然に関係のあるグループに入ろうと思って来ました。幸い、近くに海鳥センターという道の施設があって、そこが自然の情報の集約場所になっていたのです。だから、その会の会に入ろうと思っていた。

友の会の入会は最初から決めてきたから、決めてきたことをして、やがて入っている中で一番自分が心がけていたのは、とにかく皆勤賞をもらうこと。アザラシ館の行事にもできるだけ出席しようと思っていました。でも40数年もずっと仕事をしてきたから、どうしても出しゃばりになります。しかも看護師なので、ペースメーカーにならないと、と思うのです。医者はいつでももないのでペースメーカーにはなれないのですよ。ですから、看護師がペースメーカーにならないものごとは上手く進めない。それでいつの間にかそのペースメーカーに直ぐなりたがるのです。

最初からそういう人ではなかったのですけれども、自分の長い職業の間に今ではそういうふうになってしまっているということは自分でよくわかっているつもりでした。それで、1年間は新しいことは絶対言わないとそれも決めて来たのです。それでちゃんと実行しました。その代わり、下請けの仕事というとおかしいけれど、例えばアザラシ館でニュースを作るとか言ったら、私それ得意よ、パソコン得意とか言って、そういうことはすごく積極的にしよう。それで1年間踏ん張ると、その集団の中では、そこで市民権を得てくる。そうしたら、今までは月に1回しかやっていなかった読み聞かせを、対象を子どもではなくてお年寄りにしてみない？とかという提案ができるようになって、それで2年目になったら、新しいことを提案して、それと一緒にできるようになってくるじゃないですか。そうすると、今まで本当に細かくしていたのが段々広がって行くじゃないですか。

自然のことも、最初は海鳥センター友の会だけだったのですけれど、ビオトープの会とか、自然環境を守る会とか。それも結局繋がりでどんどん入って行くようになるでしょう。段々、自分で鳥を見たり、花を見たりしていると、自然からもいっぱい色々なものをもらうので、何か小さな力でも良いから恩返ししたいなという気持ちになってくる。

行儀の悪さは、習慣のなさ

それで、例えば草刈りとかしている時に直ぐ近くにウドなんかがいっぱいあったりするでしょ。そうすると、男の人がスコップでウドを取ったりする。すると、私は烈火のごとく怒って「なんでそうやって根っこから取るの。来年出ないじゃないの。」とかと言うと、すごく嫌な顔をされます。でも、「うるさいおばさんだけれど来年出なかったら困るな」というように分かってくれる。1年間辛抱していたから、2年目か3年目ぐらいからちゃんと言うようにしてきた。

それから、何か並んで待つ場合でも、こっちの人は並ばないのです。私、あれには参ります。例えば、生ゴミから作った肥料とかを町で配るじゃないですか。

そうしたら、ワーンと殺到する。「どうして並ばないの」と怒鳴っちゃうけれど、そういう習慣がきつとない。だから、次の年からは「並ぼう、並ぼう。お年寄りとか危ないから、並ぼうよ、並ぼうよ」と言うと、顔見知りもできるから、だんだん並ぶようになる。私は今まで地域の人々の行儀が悪いとかって思っていた部分があって、そういう公的なマナーがなくなっていると思いました。それはマナーなんかなくても暮らしていけるところに暮らしていたからだと思う。行儀が悪いのではなくて、そういう習慣がないだけ。並ぶという習慣を作ったら、確かに混乱しなくて、年寄りも焦らなくて良いということに気が付く。気が付けばちゃんと並ぶのではないかなというふうに思うのです。

だから、私も最初は腹が立つことが、本当に何回もありました。一番腹が立ったのが、初山別でシャケを安く売った時があって、すごい強風の中を初山別までおばあちゃんを車に乗せて吹き飛ばされそうになりながら買いに行ったのです。「どこに並んだら良いのですか」と言ったら、その係の人が「なんも並ばなくてもいいよ。時間になれば行けば良いのだ」と言うから、時間になって行ったら、台の上にシャケがいっぱい並んでいる。しかしそれで雄と雌を分けて並べてあるということのを誰も教えてくれない。身を食ったから、雌ではなくて雄が欲しかったの。ところが私が並んでいるところは雌の場所で、しかもみんな一人2匹とあって決めていけば良いのに、5匹も6匹も取っちゃう人もいて、それも決めていない。私がやっと台の近くに行ったら雄の台はあっちだと言われて、行ったらもう1匹も残っていなかった。烈火のごとく怒って係の人に抗議したけれど、鮭はもう残っていないのだから話にならないでしょ。

それで私、面々と書いて初山別の漁連に送った。許し難いと思って。だって、そうでしょう。北海道に来たらそういうやり方も慣れなさいということですか？それじゃいけない。これからは外の人でもたくさん来るし、北海道が好きで他所の人でも暮らすようになるかもしれないし、観光客だって来るわけでしょ。そしていっぱい来てほしいわけでしょ。でもそういうマナーの悪さは絶対に嫌われる。だから私はそういうところは直していった方が良く。北海道らしいでしょ。でもそうなの。北海道以外でそういうことをしたら大変なのね。

村 上： そういうのは自分で努力して、情報をゲットして、全て自分の努力でいっぱい取る。他人のことはどうでもいいから人のものをもってでもそうやって生き抜くというのが北海道流だから。(笑い)

岩 澤： 後から来る人もなにもないの。自分がまず大事なの。だから、山に生えている花をなんでも家に持ってこないと気がすまない。そこに置いておけば来年も再来年も咲いてくれるのに、なんたってきれいな花が咲いていたら自分の庭にスコップで持って来て、自分の花畑に植えたりする。それは良いことなのかなという、ちょっと疑いの気持ちを持ってほしいと思う。

村 上： 若い人もそうですか。

岩 澤： 若い人はわからないけれど、私の年代の人はそう。私は人の花畑見て歩くのが好きで「きれいだね」と言うと自慢するからすぐわかる。「きれいだべ。これは高台のあそこで取ってきた」って。「これ、何て花か知っているの」と聞くと「知らねえ」って。私もいっぱい群生したところを見つけたけれど、絶対それは人には

言えない。取られてしまうかもしれないから。でも本当は、そういったきれいなところをみんなに見てほしい。だから、情報は小出しにしています。(笑い)

村 上： ちるままさんみたいな人が、個人的にそこら辺の自然とかを一生懸命語るだけで、聞いた人はとても親しみを感じて観光的な付加価値が上がると思うし、色々なその今の情報を発信していると思います。それがまさにキャピタルだと思うのです。そういうところの価値みたいなものをもった方が増えると、きっと心がゆたかになるように思います。だけど、北海道だったら、北海道は冬があるから、人のことを考えたら駄目。(笑い)

岩 澤： でも、おじさん達に、私が「ビオトープに花を植えたい」と言った時、「何を植えたいの」とおじさん達に聞いたら、おじさん達が植えたい花は園芸種とか外来種とか大概そういう花なの。「せっかくビオトープを作っているのだから、外来種ではなく在来の自然種を植えよう」ということで、自然種で今どんどん畑を広げている。だから、私はすごく良いなと改めて思うけれど、反面おもしろく思わない人もいると思う。多分、嫌われている人にはすごく嫌われている。(笑い)

村 上： 職業柄、看護婦さんを長くやっていて奉仕するのが身についているでしょ。そして、わあわあ言うでしょ。同じ年齢の男性だったら絶対そういうことをしないから、本当に全然違う。だから、私はすごくそういう方達の価値は高いと思っていますのです。ただ、私と違うのは、私は仕事として事を起こしたわけで、生きて行かないといけないでしょ。それはたぶん非常に刺激のあることです。うちの相棒がよく言っているのは、「お前には親戚・地縁も何もないし、なんだかんだ言って、みんな親ぐらいはいるだろう。その中で全部やっていこう。なんだかんだでみんな繋がった中でみんなやっている」。「それなのにお前は、全くゼロに近いところからこの形までにしている。それは驚異的と言うか奇跡に近い」と言うのです。

色々なカントリーサインもきっとそうなのだけれど、今実際に提供している色々なサービスは、ココで生まれたオリジナルだし、おそらく海外だって同じようなことをできるような人はいないのだからって。ダニエルのすごいところは、どんな状態でも自分の評価をちゃんと過剰なぐらいしているところ。

草 薙： 自分でしているの？

村 上： だから、自分のしていることの価値、自分の生きている価値を全部自分でしっかり評価している。

岩 澤： それって凄いね。私達はへたくそだよ。

村 上： 結局、それを私に対して使ってきてくれて、自分の人生を使い、自分の技術を使い、物を作ってきたではないですか。それに対して私は、「はい、いくらですね」って、わかりやすい対価、そういうのがないでしょう。生活してしまっている。だから、やっぱりその価値を私がどれくらいわかっているのだというふうには、彼は思っているかもしれない。

岩 澤： そうやって口に出して言わないの？

村 上： 外国人と言うか、それは見ていれば、わかりますよ。

岩 澤： じゃなくて、あなたがダニエルさんに言わないの？

村 上： それは二人で生き抜くために頑張ってきたことですよ。それはやっぱりスペシ

ャルなことではあるから、それは非常に思います。次の私の役割は何？と思うけれども、なんとというか、考えてしまいます。

【 都市と地方 】

孤独と存在

稲垣： 親戚とかはうちも周りにいないので、そういった孤独感というのがあります。家族単位でも夫は本当に目一杯外でエネルギーを使って家はただただ休む場で、これはもしかして、私と違う女の人が入れ替わってもわからないのではないかと思ったりしました。農家の仲間には入れるわけでもなく、日中はおばあちゃんと草刈りして、お葬式も滅多にあるわけでもないし、保育所もその時は辞めていたので、本当に孤独感と言うか、すごく感じたことがあります。いつからそれがなくなったかというのは覚えていないのですけれど、ただやっぱり稲垣順子という存在と言うか、私が私として認めてもらうことが少しずつ増えてくると、ここに生きていて良かったなみたいなふうには感じてきました。お寺の奥さんとか、誰々のお母さんとか、そういうのではなくて、本当に稲垣順子として認めてくれる、そんなことがあれば、都会であろうが田舎だろうが生きて行けるかなという感じはしています。

草苺： このお話はすごく関心のあるところで、北海道の中に人がどんどん減っていて、本音のところを言うとやっぱり便利で安全な情報も多い都市に住みたいということと、そうでなくて自分で確信をもって地域は良いぞと思っている人達がいるのだけれども、その比率は圧倒的に後者の方が低い。

村上： 増えてきているのですか？

岩澤： ちょっと増えてきていないですか？

草苺： ちょっと増えてきている。それが今の話、都市の中の孤立と地方の中の孤立、そして都会の中の幸せと地方の幸せといったようなやつが、秤にかけるのも変ですが、ダニエルさんのアイデンティティみたいなものというのは、私どもは割と欠如している部分ですね。俺は俺だと、口では言っても意外とアイデンティティはないのです。

村上： 男の人はそれが結構確立しているのではないですか？

草苺： そうでもないです。歳と共にというのはあるかもしれないけれど。今話を続けて下さい。(笑い)

村上： 私一人では絶対今みたいな暮らし方はしないし、でもうちの主人を見ていると、何かを実現させるためにというところだから、何か方向性のようなものがないと、作る理由が出てこないという感じがします。だから今は、すごく面白いです。

草苺： 道を引くのがきょうこワンさんで、それを色々な角度からサポートしてくれるのがダニーさんという感じですか？

不可能を可能に。価値は自分が知っている

村 上： 相棒は「俺が現実にした」と言います。「俺がポッシブルにさせる」それが一番です。この冬の映画の撮影の時も、なんでもそうだし、「なんで障害者がそりを自分で操れないのだ。俺はそれを現実にする」と言う人です。「俺の力で」と言う人ですよ。すごいエゴでしょう。俺に不可能はないみたいな。(笑い)

岩 澤： すごいと言うか、自分のことをそういうふうに言うのが私達は苦手ね。どうしても自分からいと言うか、こんな良いところもあるって、こんなこともしたと、自分が思っていたって人には言えないし。

村 上： 農業をやっている方とか、酪農の方とかは、みんなそうだと思う。育てて、種牛の時もそうでしょ。彼らが作ったのですよ。「その価値を俺は知っている」と彼は言います。「他の人はそれを抹殺しようとも、俺が現実にしたということは俺が知っている」ということを言います。

岩 澤： なかなかすごいリアルだと思う。

村 上： ここの地域とかでも、すごい人がそこら中に住んでいるということだと思う。それだけのことを現実にして現実に生産するだけの技量があるということですよ。

大 平： そうは思っていない。ネットをやっていて他から色々な評価と言うか、認めてもらえると言うか、そういう言葉がネットの中でもすごく嬉しい。

稲 垣： 女の方は特に余計そうかもしれませんね。

吹雪の中のタンクローリー

草 苅： 何年前だったかな、mixi でゴンタのママさんが酪農の実状を日記で書かれたものに、本州の人達がすごく反応してレスしていた時がありました。あれを見て、エーッと言うか、雪の日もタンクローリーが来てミルクを回収にくるのだと知って驚いていましたね。それが来なかったらどうなるかという、言ってみればインフラってそのためにあるみたいな話。雪印のタンクは吹雪の時も来るみたいな話と、牛も毎日搾乳しないと駄目なこと、それらにすごく感動していた、そんな場面じゃなかったですか？

大 平： そういうのを知ってもらったというのがすごく嬉しかったです。そういうことを知らないのが当たり前で、こういう普通のことが知られていないのだなというのがそこでわかった。

村 上： 北海道を掘り起こせば、日々とんでもない冒険みたいなことと隣り合わせでしょ。私が多分ダニーさんと一緒になった理由って、多分何もなくなっても彼にはなんとか生きて行く技量があるし、私にはそれは何もない、非常に現実感に乏しいので、ダニーさんとなら大丈夫と感じ、そういうところに魅かれたのかなと思う。自営業でもやっぱりそういうふうに思ったのでしょうか。

大 平： 私達、自営で牛飼いかやってきていないけれど、これを止めてしまったら何もできないねという、そういう思いです。

村 上： 自分だって今どンドン年をとってきて、例えば建築と言ったって、それは依頼がないと発生しない。

大 平： でも建築だけではなくて、なんでもやって行きそうです。

村 上： でも中途半端ですよ、結局。上には上がいるし。大都市なんかだとマーケット

があって、同じことをやっても札幌みたいな商圈の近いところの方が可能性がより簡単に計算しやすいでしょう。それがないところで戦わなければいけないというのが北海道のほとんどだから、それは非常に消耗だし、もしかしたら最初から無駄な努力だということなのか、たまにそういうことは思います。無駄な努力をやっているのかもしれないとか。全部無駄になるかもしれないとか。やっぱりそういうことは、すごくいつも思う。それでもダニーさんは自分の価値をわかっている人だから、多分関係ない。あれが私にはないので、いつも物を作るということとは結局そういうことかなというふうにも思うし、すごく考える。

個々のイメージが与える感動の違い

岩 澤：　すごく不思議と言うか、困ったことだと思っていることが、自分らには何でもない自然や当たり前のことが北海道以外から来た人にはとてもそれが新鮮だったりすること。自分がここへ来て、東京の方から友達が来るようになるじゃないですか。冬に来ると防風林の近くに行くと、リスやウサギを探したり雪原の足跡を探したり、スノーシューで雪原を歩いたりしますよね。北海道に何回もスキーに来たけれどスキー場の雪原とは違うと言う。キシキシ木が鳴って、ウサギの足跡があって、ウサギの食べた跡があって、「こんな世界があるんだ」ってとても驚いて感動します。こんな世界って私たちがごく普通と思うことでもすごく驚きます。

サロベツに来るお客さんって、私達がパークボランティアで自然ガイドをしていると、二通りの人がいます。チラシに利尻富士が写っていて、エゾカンゾウが咲き乱れていてというチラシを見て、そのイメージをそのまま持って来る人で、目立つ花がないと「なんにもないじゃないの。」とすごく不平不満を言う人。

それからそういう写真を見て来るのでしょうかけれども、あそこへ来て草も木もないずっと続く湿原を見て、「そこを渡る風が気持ち良い。こんなところはここにしかない」と言って、花が咲いていなくても「これだけで充分だった」と言って帰る人。それってどこに違いがあるのかと、私はいつも思います。同じものを見てもすごく感動できる人とそうでない人。私達は観光に携わっているわけでもなく、それで商売しているわけでもないから何でもないけれども、そういう利尻富士があってエゾカンゾウがあってというものを、観光客に見せようとしていないかなって、すごく思う時がある。そうではなくて、このありのままを見てもらって感動してもらえば良い。できない人はもう来なくても良いかなとも思います。

ツアーによる意識の違い

村 上：　そういう言い方をする人なら、その季節の話よりはどうやってこういう人達が暮らしているのかの話ですよ。どうやってここで生計を立てているのか。こういう暮らしがあって、こんなことがあって、そういう話です。除雪にしても、こんな感じだと。まさか、犬ぞりしている私からそんな話を聞かされると思わないでしょうけれど。例えば若いカップルとかが来たりするでしょう。そうしたら当然別に何の変哲もないちいさな町に来て、ずっと走っている内にだんだん田舎の景色になって、一面雪で、そこに酪農や農家があったり、おじいちゃんがいたり。そうすると、ボロボロの家もあるわけだから、除雪できない家とかがいっぱいあり

ます。そういう経済ではない暮らし振りの話とか、雪の話とか、そういう話をお客さんにします。

草 苺： どこでヒットするかによるけれども、ネイチャーでいくのか、暮らし振りだとか、風景だとか、何か色々な琴線が人によって異なるところがあります。北海道の地域にお客さんを案内していると、本当にこの辺でみんなどうやって食べているのだろうかと聞かれることがあります。

村 上： そういうことに興味を持って来る人が多いのではないですか。自分で商売をやっているような方とかもそうだし、結構そういう人が多いのではないか。個人で来る人はほとんどそういう気がします。

岩 澤： 個人で来る人と大きなツアーで来る人とは本当に違う。エゾカンゾウと利尻富士という人は、大きいツアーの人が多いです。

稲 垣： 大きいツアーで北海道を駆け足で回れるようなツアーも、バスガイド自体があのそのビジターで降りた時に、「ここは何もないから。」みたいなことを言ったりします。びっくりします。

村 上： 同じ人間でも個人で探してくる人もいるわけでしょ。

稲 垣： 個人で来る人達は、意識が高いです。幸せを感じる能力というのが高いです。私は勝手に「幸せ筋肉」と言っているのだけれど、高いと思います。

村 上： 私のところには、ちるままさんぐらいの年齢の方が来ます。二人とか、一人でいらっしゃる方もいて、例えば夫がどうのこうのとか、残りあと何年かの自分の人生だからと言って、好きなことをしようと来るわけです。だから、その人が決めて使ってくれたお金ですよ。ありがたい。

【 幸福の感性 】

幸せ筋肉のトレーニング開始時期と鍛え方

岩 澤： 幸せ筋肉って、低い人と高い人がいるけれど、そのトレーニングっていつから始まると思いますか？私は子どもの時からだと思うの。

稲 垣： 気づいた時に始めましょう。(笑い)

岩 澤： 自分が珍しいものを見たら、必ずジュニアレンジャーの子に「おばさん、こういうものを見たのだけれど、行きたい人～？」と言って連れて行く。最近は、自分だけで楽しまないことにしている。

稲 垣： 幸せ筋肉はみんなが持っていると思う。持っているということにいつ気づくのかかわからない。死ぬまで気づけば良い。(笑い)

草 苺： それは例えば、ちるままさんは、本州でも山に登っていたから、その筋肉は衰えないでいるかもしれないけれど、一旦ここで生まれたのに、その頃は思わなかった。本州に行って40年後に戻ってきてから気づいたということになりますね。

岩 澤： 戻って来たから、それが良かった。それで何かに書いたことがあるのだけれども、本州での私の花の楽しみ方というのは例えば山に行き1回きりの楽しみ方で、その花の咲く季節にその花で有名な山へ登って、その花を見て終わりなの。でも北海道へ来ると、同じ場所に何回も行けるから、その花が芽を出した時から、咲

いて種になるまでずっと見ることができる。おていさんが私に冬か秋だったかの観察会の時にオオウバユリの種を揺らして飛ばせて見せてくれたの。すごくきれいでびっくりしました。今は北海道にずっといるから、そのオオウバユリが芽を出した時からずっと続けて見られる。だから、自然の楽しみ方の奥が深いと言うか、帰ってきて全然違う楽しみ方になった。ある鳥の生まれた時から、雛の時から、幼鳥の時から、それこそおしゃれしている時から、あまりきれいじゃない時からというふうにして、いろんな場面での鳥に会うことができるという幸運。それがやっぱり東京にいたのでは絶対私が死ぬまで一度も経験できなかったことだろうと思う。

稲垣： でも田舎に暮らす子ども達は、住んでいても自然体験というのを豊かにしているかと言うと、案外そうでもないです。だから、うちに子ども達が来て、林の中に連れ出したり、ちょっと橋渡しをしてあげることによって、驚きをもって見てくれます。目に入っているはずなのに見ていないということがよくある。ここで生まれ育った息子は残念ながら野外活動に興味がありません。が、大人になった時に、フキノトウ採りに誘ったのです。渋々ついてきました。そこでフキノトウの匂いを嗅いだ息子は「すごい懐かしい。」と言ったの。私は商店街で育ったくちななので、それを懐かしいと思えない。子どもの頃の経験がないから。その時、うらやましくて。だから、あまり自然体験が豊かではないなと思ってても豊かではないのではなくて、もっと染み込んでいるのではないかなという感じは最近しています。でもそれに本人がいつ気づくかはわからないけれど、気づいた方が幸せ筋肉が鍛えられると思います。(笑い)

村上： やっぱり気づかされるということですか。他者と違うところがあるから、それに気づかされる。だから、田舎でも都会でもそうです。鷹栖や東京の子ども達が来る。雪と遊ぶことに対する貪欲度が百倍くらい違います。その中でもある程度の年齢になったら冷めてしまう子は冷めてしまうけれど、それにずっとつきあっていかなければいけないというのは、こちらも相当エネルギーが要ります。

土地から感じる先祖や風水などの縦の繋がり

草苺： ゴンタのママさんには、搾乳の時間が来ましたら、一時退室して頂くことにして、7時過ぎぐらいに戻ってこられてから、「女性が地域の中で力を持っている」という話題でまたお話ししたいと思います。

その前に先程出てきていた話の中で、村上さんが一番最初に言われたことと繋がるのですが、土地を選んでいる時になにか風水のようなものを、とても良いものを感じたと言いました。実は私は村上さんのところに初めて行く時に、すごいところだと写真を撮りまくって行き着きました。

村上： 本当にただの農村水田風景なので、特別なことではないですよ。

草苺： ただ、それがやっぱり違う。何かと言うと、渡り鳥なんかを見ている時に、鳥がただ季節で移動しているというよりも、何か自然の摂理みたいなものがそうさせていて、そこのどこかに何か自然の力が働いている。

村上： 渡り鳥はルートをどう決めているのですか。上から見て決めているのですか。

稲垣： 大きな鳥は船頭と言うか、経験者がリードするようです。

草 苺： ウトナイなど胆振の白鳥は、高速道路の上を飛んだり、夜に飛ぶ。で、何を言いたいかと言うと、その風水だとか、今まで話してきたのは人と人とか、フラットなネットワークが濃いか薄いか、気に入るとか気に入らないとかの話をしてきましたが、時々、土地だとかとの垂直のつながりもある。私の友達が農業をやっていて、ある時フツとこの土地と一緒に農業をやっているということに幸福感が押しよせ、すごいパワーが足の裏から入ってくるみたいな体験をしたと語っていたのです。

稲 垣： 農家の人達は、そうかもしれない。

草 苺： そういういつもフラットな関係のネットワークのことを考えているけれど、そうではなくて繋がりは縦にも、先祖だとか、それから土地がとか風水で感じるものなんかもそうではないかということです。ドイツの人なんか特に気を感じるのが上手いと聞きます。ダニエルさんなんかどんな感じなのか。それからゴンタのママさんなんか、原野で歩かれているような時に、フツとなんか、そういうことはないですか。

村 上： 私は、ゴンタのママさんが撮る写真がいつも面白いと思っている。

稲 垣： 私も、どうして同じところを見ているのに、こんなに違うのだろうといつも思います。

写真を撮ることから土地への愛着が

村 上： 好きで撮ったものかどうかが、全体の撮り方で非常に感じます。

大 平： トラクターに乗っていて、「これ、良い」と思った時に撮る。

村 上： 写真家みたいな感じだね。良いカメラを持っているなどは思いますけれど。

大 平： 普通のデジカメですよ。

稲 垣： そういうセンスがすごくあるという感じは昔からです。

村 上： 写真を撮ろうと思う時って、何かそういうものがないと撮れませんよ。シャッターも押せないし。撮ろうという気にならないじゃないですか。本当に撮りたいなという時は私はかなり限定されます。

大 平： 写真を撮るようになり、土地と言うか、そういうものに愛着が湧きました。

草 苺： カメラを通じてというものがあるらしいですね、そう言えば。

大 平： なんかが吸い込まれると言うか、これ良いというふうに思っちゃうと言うか。見てもらえるかなというのはあります。

稲 垣： お子さんが小さい時に写真で入賞したことがありましたね。賞品はディズニーランド。

村 上： センスがあるなあと思っていた。

草 苺： 賞をもらったことがあるのですか。

大 平： はい。

村 上： 写真ってどこをどう切り取るかは感性ですよ。だから、色々なおじさん達が退職して良いカメラを持って写真家だと言ってやるじゃないですか。いっぱい額に飾って、そこにはセンスが出てくるので、テクニックがかなり凝っている場合もあるけれど、それはやはりその先は感性ではないかなという気がする。

大 平： 撮っていても楽しいです。

村 上： そうというのは、すごく良いかも。

土地から感じる気の心地よさ

稲 垣： 原野を歩いている時に、私は風水とかそういうのは全然わからないのですけれど、サロベツってあまり音がないので、それこそ景色が、絵のような感じる時があって、そこに何かスッと一步入るといふか、ちょっと変わった感覚になる時があります。それは土地の気みたいなものなのかどうかはわかりませんが。

村 上： 私は、地図を見るのがすごく好きです。国土地理院のデータベースの地図をえらい時間をかけて見る。最近の習性になっているので、どこか新しいところへ行きますとなったら、まず国土地理院の地図とかデータベースを出してきて、じっくり見て、こんなふうになっているとか、ここをどういうふうに走れるかを見ています。川があつてとか、人がいっぱい住んでいるとか、それらを地図ですごく見てから、その場に行く。それが面白いのです。

草 薙： 2回旅行するようなものです。

村 上： 自分がここだ！という場所を地図上で見つけると、一度は足を運んで見ます。確かめる為には季節ごとに足を運ぶこともあります。町内だったら多分全域それを潰しているでしょう。それで、その場所に身を置くと、景観阻害要因が周りにいっぱいあつたり。そこに身を置いても、すごく暗いといふか、何か感覚が違つうといふか、そんなことがよくある。

岩 澤： 逆にね、なんでもないことなのだけれども、自分がそこに、あるべきところに戻つて来たみたいな、そういう感覚になる時があります。ここだったという、そういう気持ちになることはない？ 前に来た場所でもないのだけれど。

村 上： 直ぐ帰ろうとしない場所ですか？

岩 澤： 次にはそこにサンドイッチでも持って行つて、お昼食べてお茶してとかしたくなる場所ってある。何カ所もある。

村 上： それは結構大事ですよ。

草 薙： 居場所みたいなものですね。

村 上： だから、夏に走っている時は、冬になったらどうなっているか常に想像しながら走ります。こういうルートを作つてこうやっていけるだろうとか。あの先は何があるだろうと思つて、ずっと見ています。そんなことを考えながらいつもウロウロして走るので。その時に、自分もワクワクするから、ワンちゃんはもっともつとです。その時は、途中で吹雪になったらどうだとか、色々なことを考え、考えているだけで結構オーツと気持ちが盛り上がつてきたりします。でもそれは自分がその場においてワクワクしたいと思つているだけで、つきあっているくれる人はどれだけいるかという感じですね。そんなバカみたいな話はだいたい却下されるから、相棒はそういうのにつきあつてくれない。そういう時はもう結局遭難覚悟。助けてくれといふのは悔しいから、自分で全部戻つて来れることを考へて行かなければいけない。雪が堅くなつてないかとか、何回も夏の間に行つて、こんな時はこうでと考へながら、たいへんなことがあつても、それは誰にも言わずに。そうでないと怒られるから。(笑い)

稲 垣： 土地の気みたいなものは、やっぱりあるのですか。

- 村 上： あると思います。水の流れとか、木々の元気度が違うのではないですか。
- 草 苺： 私なんかは林をよく見ていると、ここの林に入るのは「気がそがれる」とかはありますね。だから、自分が良いところと悪いところを区別して知っているし、好きな木もあるし、山を見るならこことかね。だいたいスポットが決まってくるね。
- 村 上： それって、木々が新しく生え変わったりしているのが、非常に生き生きするということはありませんか。
- 草 苺： それもあります。逆に気がそがれるような場所というのは、何を植えても枯れるとか、ツルに絡まれて樹木が呻いているような林だとか、傾いているとか、細くて先に枝がちょっとついているだけのほったらかしの林で、一面全部がそんな状態というのがよくあります。あれをよく見ると、霧が入ってくる、風がこう入ってくる、そういう入り口だということがわかります。やっぱり因果関係ははっきりしていると思う。ですから、逆に言うと、そういう住みやすい場所の作り方というのは、かなり風水の感じはわかるような気がします。背中に山を背負い、こちらに広いところがあると、それだけでもたいてい気持ち良いです。きょうこワンさんのところなんかは、まさにそんな感じですよ。
- 村 上： 全体的には多分そういう感覚だけれども、それでも別の要因で色々な難しい部分がいっぱいあった。だから、きっと、私は土に関わっていないから良いのですよ。土から生産していないから。
- 草 苺： 有機栽培はしていても？
- 村 上： あれは自分の生活の糧ではないでしょう。(笑い)
- 岩 澤： 自分で食べるものは作っているの？
- 村 上： 食べ物と言うか、夏の間はサラダ野菜とか、冬の間は越冬用のタマネギだとか、じゃがいも、にんにく、そういうレベルで、ダニーさんはちゃんと口に入ればよい。あの人の感覚だと全然違う。ところで、ここは霧が深いのですか。

【 自然とコミュニケーション 】

自然は厳しいが故に輝きは大きく

- 稲 垣： 滅多にないのですけれど、昨日はすごかったです。霧の時は湿原がすごく生き生きしているように感じる。
- 草 苺： 湿原は霧の日が好きみたいです。晴れば良いなんて、そんな底の浅い話はこころではしない。(笑い)
- 岩 澤： でも度々行って、色々な場面を見ているからそういうふうに思えるようになる。一度や二度しか来ない人はそうは思えない。
- 村 上： 本当の良さはわからないよね。厳しいところの方が輝きも大きくなるのではないですか。厳しいところに生きるのは大変ですよ、やっぱり。何よりもきれいなものだと思いますけれども。
- 稲 垣： 防風林は、夏には入れないのですけれども、冬はそこが楽しみです。最近ここ何年かはカメラマンが原野に多く来て木道に陣取っています。以前はこの辺一帯は

私が独り占めでした。みんな豊富側に行ってしまうのです。(笑い)

村 上： そんなに、どこから来るのですか？

稲 垣： 結構道外の方とかもいますよ。

村 上： 写真撮影のために？

サロベツ湿原の自然

稲 垣： 今、アカエリカイツブリが卵を孵して、今年どういうわけか、木道の近くに浮巣を作ってしまった、いつもはネタばらしなのですが、木道が壊れているからと言って通行止めにしていました。今年はそのタイミングが悪くて、どんどん入ってきて、注意ができない状態です。それで鳥は動かないし、逃げてくれれば良かったのですが。

草 苺： 毎年悩んでいるようだけど、いっそのことカイツブリの浮島にひもをつけておいて、反対側からグーッと引っ張るようにしては。(笑い)

稲 垣： カイツブリも慣れて、全然逃げもしない。でもあまり良いことでもない。もう少しそっとしてあげたいという感じはしています。

草 苺： 去年、案内してもらった時、親鳥が卵から離れたところで溺れたようなディスプレイをするわけですよ。木道の側に浮き島が寄って来ていて、彼女らにとってはかなり真剣勝負。

村 上： そのうち離れたところに巣を作るのではないですか？

稲 垣： 前はそんなことがあったけど、慣れてしまったのか、今は平気ですね。それが良いか悪いかわからない。

岩 澤： 直ぐそこの沼はなんていう名称？パンケに行く途中にあるでしょ。

稲 垣： それも長沼。

岩 澤： あそこは子育てしているのかどうか知らないけれどアカエリカイツブリの番がいます。

稲 垣： 間の小沼にもいます。こっち側のパンケの右側にも木道はあるけど滅多に歩かない。

岩 澤： あそこは草を茂らせっ放しで木道が見えなくなっているでしょう。なんかあそこは嫌だね。

稲 垣： 滅多に歩かないです。

草 苺： 突当たって左側に行くと長沼沿いに木道があってビジターセンターに着くわけですね。

稲 垣： それは全然OKですが、問題は右側がね。

岩 澤： ちょっとした小さな木道なのだけれど、なんか嫌なんです。

草 苺： 今度、行ってみよう。(笑い)

稲 垣： 鳥もたくさんいます。

草 苺： ノゴマが普通に見られますか？

稲 垣： 見られます。うちの庭にも来ます。

村 上： そうというのは全然知らない世界なので、明日行ってみたい。

稲 垣： 明日、晴れたら是非。

岩 澤： ノビタキって可愛くないですか。あんなに小さいのに健気で。すごい気が強い

と言うか。一度ノビタキの巣にカッコウが託卵しようとしたら、ノビタキとカッコウって大きさが10倍ぐらい違うじゃないですか。それでも向かっていくのですね。私、拍手喝采しました。(笑い)

都市に対する田舎暮らしからくる劣等感

草 苺： 先程の感性みたいな、幸せを感じる筋力みたいなものというのを、子どもの時に1回育てておくと、大人になってからすごく戻りやすいとかありますか？

岩 澤： そういうふうに思います。

草 苺： そうなると、子どもを小さい時から原野とか森林で遊ばせるという意味は、数字で測れないけれども、とても大きく、少しずつできてくるような気がします。それでも田舎に住んでいることが、都市に住んでいることより劣っているような価値感覚ってありませんか？本当は都市に住みたいという本音がどこかに巣くっているのではないのでしょうか。

稲 垣： 劣等感はあるかもしれませんが。私は、小さな子どもの親子遊びを担当していたことがあります。なるべく外に連れ出して遊ばせるのですけれど、でも自分でやっっていながら、なぜ自然体験が大事なのかよく考えたりします。だって、町で育っても全然OKなのだし。でもそんな中でも最近自然の中で触ったり、手足を使うということで、勘のようなものが鍛えられるのかなというふうに思うようになりました。

草 苺： 不思議な世界ですね。バランスとかもでしょ。

稲 垣： そうですね。あとは自分の身を守るとか、ただ木道を歩いていても、どうしても今日は歩きたくないとか、変な気がします。本当は浄土真宗だから、怪しげなことを言っではいけないんですが、きっと動物か何かがいるのか、気みたいなものを感じます。そんな時は自分を信じて絶対戻るようにしている。でも何年も自然の中にいると、そういったものが鋭くなると言ったら変ですが、やっぱりトレーニングされてくるのか、強く感じるようになってきたりすることはあります。

経験(トレーニング)から感じる得る研ぎ澄まされた感性

村 上： 私、ワンちゃん達をいっぱい飼っているでしょう。一番最初の頃ですけれども、3頭の犬がうちに最初に来た時に、目が六つあって、みんなで見るでしょう。みんなに見られることで少しパニックになった。1頭でも大変なのに、みんな必ず要求してくるので、どうして良いかわからなくて、すごい大変だった。

初期の頃は扱えなくて、チームも上手くできなくてね。今は30頭以上いて、家の中にも一緒にいるでしょう。私は家庭の中でまともに喋る相手がないのですよ。外国人の相棒は最近益々自分の言葉になっているので、ワーツと私にわざとネイティブ丸出しで、「お前はどうせわからないだろう」という感じで言う。それで解らないのですよね。犬と一緒に暮らしているからかどうかわからないけれども、この人は何を考えているだろうとか、仕事の場とかでも相棒は今何を考えているのかとか、そういうことを常に考えていないとわからなくなるのです。相棒と一緒にあってからずっとそんな世界で生きています。過剰に入り過ぎる時があ

るので、良いのか悪いのか良くわからないですが。

草 苺： 犬に対する気使いもお互いにするんですね。飼い主に対しても向こうは見ているだろうし、こっちも返すわけですね。

村 上： お互いに黙った状態で、言葉のない状態で、相手が何をしたいかというのがわかる状況です。今、こういうふうにして、こうしたいだろうなと瞬時にしてわかる。わかる中で、ごめんよ、向こうは向こうで今日は何をするのだろうと、全員が私の一挙手一投足をずっと見ています。今、一緒に遊べないとか、今、つまらなく思っているなとかを全身で感じます。

稲 垣： それは何年ぐらいから、そんなふうになるようになってくるのですか。

村 上： お子さんを育てていたらそうでしょう。

稲 垣： 赤ちゃんはそう。あと、おばあちゃんの介護も寝たきりになった時に一番何をしてほしいとか、わかります。心地よい顔をするのがやっぱり私だった。常にいますから。

村 上： わかる、わからないではなく、自然にそなわっているもので、そういう感性ですよ。そういう暮らしの中において、それが研ぎ澄まされたのかどうかかわらないけれど、子どもなんかわかりすぎるぐらいですよ。4~5歳の子どものとか、幼稚園とか小学校の子どもが来たら、もう本当にどういうふうに育っているかまでがわかる感じのときがあります。男の子だったらお母さんのことをものすごい気を使って全然我を出していないとか。これは開放させなければいけないとか。それを親はわかっていない。親は子どものためにですけどね。自分でいっぱいです。だから子どもの自由というのは少なく、それは若い親であるほどそうです。親自体がエネルギーの塊だから、それを見ていたらすごく見えるので、子どもを連れて来た時は、それをどういうふうに解放、解決するかとか、そういうことを考えます。

意思の疎通は言葉のキャッチボールで

岩 澤： 言葉で表せられないことはとても多いということはよく解るけど、でも自分と同じ年代、例えば自分のパートナーとは、言葉で理解し合おうという傾向が強い。だから、きょうこワンさんみたいに、例えばネコのようにいくら言葉で話しても通じないとわかっているものには、言葉を抜きにして意志の疎通をしようとするじゃないですか。だけど、言葉が通じる対象に対しては言葉でやり取りをしようというふうにならないですか。私はすごくそういう傾向があるものだから。

稲 垣： 私も言葉でなるべく夫には言います。

岩 澤： 特にパートナーにはそうですね。

稲 垣： すごい厳しく言います。察してもらおうなんて甘い。多分わかっているはずなのに。

岩 澤： 向こうに、そんなこと言わなくたってわかるだろうと言われるとすごくカチンときます。「見えませんから」と言ったりする。それから、「そんなこと言わなくわかるだろう」と、それが当たり前のこととして扱われると、とても嫌な感じがする。

例えば、私は辛くないかなと思ったりする。そういうふうにして言葉がなくて

も全部想像する。そうすると、自分も言葉を出さなくてもわかってくれるでしょうっていうふうにならないのとか思ったりする。私だったら自分ができたら、「あなただってできるでしょ」というようなことを、相手にも要求してしまいそうに思うけれど、そんなことはないの？

村 上： しんどいと思うのは、そこは同じコミュニティにいる、違うところで生まれた日本人の場合だったりする。その中で違う価値観を持っている人とか、あと到達しようというものが高い人とかがいるでしょ。その人が感じるフラストレーションみたいなのは、やはりそこに色々違いがあるなと思う。

草 苺： 今、話されていることは、最初から心地よく聞いているんですけども、感性和コミュニケーションカの話はずっとしてきていますね。私は何年か前にある先生から聞いた言葉で、アフォーダンスという理論がある。アメリカのギブソンという人がやっていることです。それはつまり、植物でも動物でもあるメッセージを常に出しているということ。そしてこちらがそれを感じ取れないだけだということ、樹木でも何でも。

例えば、そのアフォーダンスの典型的な例がドアのノブがあります。あのノブの形そのものが引っ張れというメッセージをあの形が表しているとするのですよ。これは何かと言うと、これは引くようにデザインされていると同じように、そのメッセージをどうやって感じ取れているか。その感性を封印しているようなところが私どもの中にあって、だからサルと一緒に暮らすとサルの気持ちがよくわかるという聖人の話（日本人）を読んだことがあります。きょうこワンさんの話しはアフォーダンスの話はまさにその領域のような気がします。

村 上： 面白いのは、相手がこの人に対してはメッセージを言えば受けてもらえるし、わかってもらえるなというのがないと、相手はパーっと出してきますから。

岩 澤： それはすごくわかる。

第三者の介入で働く理性によるコントロール

村 上： 私の場合は、ワンちゃんに対しては、押さえつけたり支配したりする躰はしていません。橇犬なので、元気にそりを引いてほしい。みんなそのまま、犬なりの感性のまま、暮らしています。犬らしく、生き生きと遊んで悪さもしていますが、たぶん私も主人もそれを受け入れているから、そうなのかもしれません。

そこに、知らない第3者が入ると途端に仮面がかかったように、(そうでない子も居るのですが)メッセージを出しません。だから、その人達からみたらそこらのワンちゃん(笑)犬ですらそうですから、きっと他の生き物もそうなのだろうとは思いますが。人間なんかもっと複雑で豊かな感情があるでしょ。

ヒトは理性でいろいろコントロールしているとおもうので、そここのところが生き生きとできる社会なのか、出来ない社会か、海外だとみんなが生き生き自己表現しやすいから、いろいろなことが起こるのかなと思う。そこが、日本の社会というのは、なかなか表現をしにくいというのか、みんなが仮面をしているような風のうちには主人は言います。

稲 垣： 子ども達もそうです。剣道少年団で夫が剣道を教えているのですけれど、その剣道の子ども達は日曜学校に来ている子が多いのですね。あと小学校の放課後ク

ラブにも顔を出し、そこにも同じ子ども達がありますが、表情が違うのです。子どもは意識していないけれど、仮面がちゃんとある。その関係性で自分の都合が良いようなのかはわからないけれども、なるべくそれを少しでも取ってあげたい感じはする。お節介かもしれないけれどもね。

そういった色々な場所が子どもに関してはたくさんあれば良いのではないかなと思って、それでお寺に呼んでおいでというふうに言ってあります。親の前ではまた違うので親はついて来ないでと。(笑い)

村 上： みんなが言いたいことが自由に表現できて、表現することを怖がらなくても良いとか、自由に活動できる、自分らしく生きられるような社会になるのが一番良いのじゃないかな。

稲 垣： この地区もそうですけれども、違うということにすごく怖がるというか、不安がある。だいたいみんな同じく開拓に入ってきて、みんな一緒に頑張ってきたと思うのです。だから、それでたくさん守られてきたのも当然あるだろうし、変わることが、すごく不安なのだろうね。だからと言って現状に満足しているかと言ったら、そんなことはなさそうです。

先住者との間の壁

草 苺： 良いところも悪いところもあるのはもちろんだし、できれば地域で幸せに暮らすために開きたい感性と、もう放っておいてもいいような部分、例えばどんな噂が来たって私は傷つかないよというようなものがあっての方が良い。その辺のところを、ひょっとしたら外歩きのあんな中で応用して、そうすると地域の見方もだいぶ違って来るだろうと思う。ちるままさんもおっしゃるように、道端に咲いている何かというものをずっと見ているだけで、そこに神様を見つけられるような、そういう感性というのが私は欲しいような気がします。

稲 垣： そういう場に住めばそういう感性が与えられるというのはある。その場に身を置くことで、気づかされる部分がいっぱいあるから。私も多分そうだったと思うので、その辺を共有したりとか。

岩 澤： それを私が40数年振りに帰ってきて、こうやって感じたことを地域の人と共有したいとすごく思うのです。

村 上： 私も、ちるままさんみたいな、お客さんがわざわざ来てくれたりするじゃないですか。その時に犬ぞりに乗る前と乗った後に話をすると、その時がすごく面白くて、その顔を見ていると色々なことを感じられる。その楽しそうな顔を見ているだけで、すごく幸せなわけ。やったぁみたいな。あの犬達は人間より命が短いから、生きている、走るというのが彼らにとって一番幸せなことなので、自分のエゴもありますが、あの子達にも幸せなモーメントや機会を少しでも作ってあげたいと思う。こんなふうにしたら素晴らしいだろうな、こう行ったらすごく感動するだろうなとは思っています。そういう思いがいっぱいあるので、冬にはそういうことをやっていけたらいいなと思う。

アニマルセラピー

草 苺： なんかアニマルセラピーみたいなところがありますね。

村 上： セラピーにはなるとおもいます。まえに学校の長期休暇以外のときにいらっしやったご家族の中に、登校拒否か軽い自閉症か、普通の子供さんよりも無口でシャイな印象の子供さんがいて、なんとなく、気を使っているのかなという雰囲気は感じられるのだけれど、その子が犬ぞりに乗って帰って来たら、急に活動的になっておしゃべりになっているのですね、ごく普通の子供みたいに。

普通のお子さんは、さらにパワーアップしてその辺で雪まみれになり、ワン子達があきれているときがあります。

岩 澤： 動物ってそういう力を持っている。

村 上： それはあるとおもいます。そういうご家族のご両親の喜ぶ顔は嬉しいですね。

とにかく、子供達の場合は、どんな子供でも、犬の力は大人よりもずっと強く感じるだろうし、感性もみずみずしいなかで体感する事で、しかも自分と犬とだけの道中の中でずいぶん勇気を奮い起こしている場面もたくさんあるとおもうので、犬ぞりに乗ったあとは、うんと褒めてあげることにはしています。

写真をあげるときに、・・・・・・・・

子供達の帰る時の目と表情の輝きは、来る時と比べると激変していますよ。

草 苺： なかなか良いですね。

村 上： 見ていたらわかるじゃない。線が細いか弱い体型で、そういうシーンに毎年 1 回でも 2 回でも出会えれば、やっててよかったなという感じです。

岩 澤： 動物もそうだし、自然もそうです。

稲 垣： 何年前かに、東京の方から若者が宿泊体験させて下さいと頼まれたんです。20代で何でもすると言われて、知り合いの人から紹介されたのですが、草取りをしたり、犬の散歩をしたり、なんかわかりますよね。

村 上： 犬の現場では、感動のシーンって結構ありますよ。あとから遺影の写真にするという手紙が届いたり、あまりその後は文通とかのフォローとかしないけど。ただ、写真を持って、こういうことを家族でやったという場を作っただけで私は良いので、そういった意味では、すごくダニーさんに感謝です。だって、すごい悪妻じゃないですか。犬いっぱい飼って。(笑い)

岩 澤： 良妻とか悪妻とか何をいっているの。それはきょうこワンさんが決めるのではなくダニーさんが決めることでしょ。(笑い)

【今こそ、地域には女性の力が必要だ】

岩 澤： 女性力のことだけど、源になるのは「おしゃべり」じゃないですか？

稲 垣： 人の悪口を何だかんだいっていてもほっておけないとか、困っている人がいるとお節介するとかそんなところはあるかもしれない。

岩 澤： 女だけでも駄目だけど男だけでも駄目で、それがちょうど良いバランスでミックスしているといい形でなるのではないのでしょうか。

草 苺： 男は言葉が少ないかもしれないですね。

岩 澤： 言葉足らずですね。

草 苺： メッセージの出し方として、言わなくても分かるだろうとか。それが身勝手だ

と言うわけですね。

これからは NPO ですよという人たちの声があるのと同時にこれから地域を支えていくのは女性かもしれないと思う。女性の力が世の中を変えるかも知れない、というのが普通になってきたような気が、私のまわりではしますね。

草 薙： きょうこワンさんの犬ぞりは、地域のブランドや観光に繋がってくる一つのビジネスモデルです。例えば、女性が地域の中で下支えしていくことだけを追っていくと、女性は、読み聞かせや介護の話だとか子育ての話などと目の前にある必要を全部追って行って、必要があればそれらを回り道してでもまた戻ってくるみたいに変幻自在にやっていくところがある。その辺は男にはできない。

岩 澤： 私がしていることは、子どもから老人、認知症の人へと広げてもお金が絡むわけではなく、ボランティア。お金の絡むことはそれだけ敵も多い。

女性は環境に適応するとよくいわれますが、今なにを必要とされているかに敏感ですね。今こういうことをしたほうがいいのではないかとか、そして実践する。

草 薙： 最後はちょうど「女性は今現在のニーズとリアリティーに生きる」ということになるのでしょうか。やはりこれは今、地域の身の周りが本当に求めていることを実践していくという、ものすごく大切な部分だと思いますし、だからこそ、地域は女性に大活躍してもらおうとどんどん変わっていくのではないかと、という気がしてきます。

一応、この辺で一区切りをつけたいと思います。ありがとうございました。

以上。